

らかなものはなかった。T1強調画像は筋肉の解剖学的な異常を同定するには得意であるが、質的な異常はなかなか描出することが難しく、今回の検討でも筋の質的变化に関する情報は得られなかった。

一方、T2強調画像及びT2強調画像脂肪抑制では、これまでの報告にも見られるように、筋肉の量的変化のみならず質的变化まで描出することが可能であり、今回の検討でもいくつかの異常所見が認められた。主として筋肉の輝度変化（周囲筋肉に対する高輝度変化）及び筋萎縮に着目して分析を行った。なお、今回の検査では両側の比較検討が行えないため、筋肉の萎縮については確実とは言い切れない。

個々の施設における結果を示すと次のとおりである。

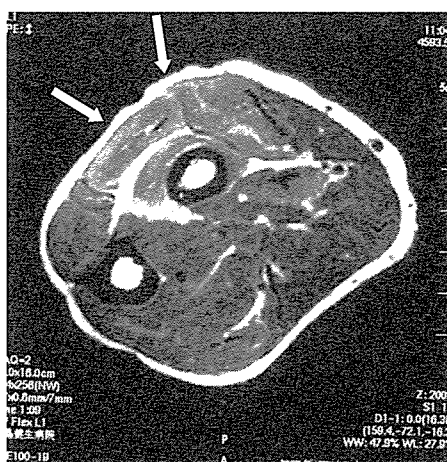
徳島：振動障害群でMRI上前腕あるいは手部の骨格筋に輝度変化を呈した症例は、30例中12例で、前腕伸筋群（+）2例、（±）1例、橈側手根屈筋（++）2例、（+）1例、母指球筋（+）2例、（±）1例、小指球筋（++）1例、（±）1例で、骨間筋の筋萎縮が見られた症例は（+）1例、（±）2例であった。一方、対照群でも軽度ながら異常所見が認められた。これらの内訳は、前腕伸筋群の高輝度変化（±）1例、小指球筋の高輝度変化（+）1例、（±）1例に、尺側の骨間筋の筋萎縮が1例であった。

岩見沢：振動障害群16例中陽性所見を認めたものは3例のみで、その内容は回外筋のT2強調画像での高輝度変化、回外筋のT1、T2強調画像での高輝度変化（これは脂肪抑制では等輝度となり、すなわち筋肉の脂肪変性が予想された）、骨間筋の筋萎縮であった。なお、対照群に異常所見を認めたものはなかった。

美唄：振動障害群13例中陽性所見を認めたものは4例で、3例では骨間筋の筋萎縮とT1、T2強調画像での高輝度変化を認めた、これらの症例では、脂肪抑制画像では等輝度を呈し、脂肪変性の状態であることが示唆された。また上記3例のうち、1例では前腕の屈筋群でも同様の所見（T1、T2強調画像での高輝度変化、筋萎縮）を認めた。1例では母指球筋の軽度高輝度変化を認めた。対照群では1例に回外筋の高輝度変化を認めたのみであった。

陽性所見の見られたMRI像の代表例は次のとおりである。

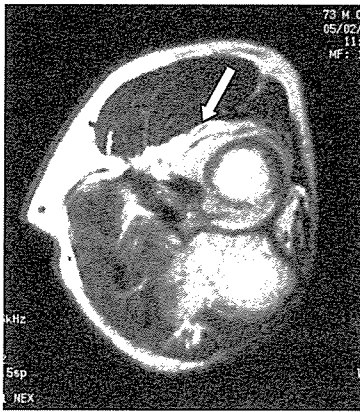
#### 1) 伸筋群の高輝度変化（前腕中央部の横断面）



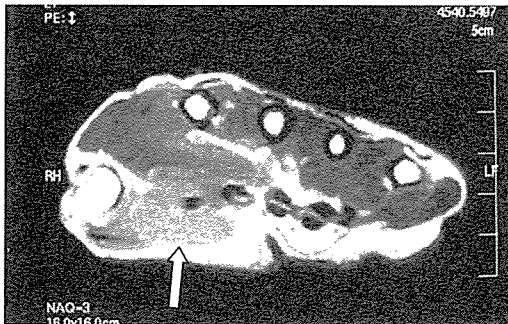
2) 屈筋群の高輝度変化 (前腕中央部の横断面)



3) 回外筋の度変化 (前腕中枢部横断面)



4) 母指球筋の高輝度変化、筋萎縮 (手掌部横断面)



5) 小指球筋の高輝度変化、筋萎縮 (手掌部横断面)

